

列国議会同盟（IPU）と帝国日本

伊東, かおり

<https://hdl.handle.net/2324/2235991>

出版情報 : Kyushu University, 2018, 博士（文学）, 課程博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)



氏 名	伊東 かおり			
論 文 名	列国議会同盟 (IPU) と帝国日本			
論文調査委員	主 査	九州大学	講師	国分 航士
	副 査	九州大学	准教授	岩崎 義則
	副 査	九州大学	教授	遠城 明雄
	副 査	東京大学	准教授	山口 輝臣

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

上記の論文は、第一次世界大戦前後から戦間期における日本と列国議員同盟（以下、IPU）との関係を中心に、帝国議会の議員外交について考察するものである。

序章では、先行研究を整理した上で、「国民主義」と「国際主義」という観点および帝国議会の活動という視角から、議員外交と IPU への注目の必要性を指摘する。

第 1 章では、第一次大戦勃発までの IPU と日本の関係を論じる。IPU への加盟をめぐり、衆議院は、既存の外交の在り方に不満を抱く議員たちの存在もあり、賛同した一方、日露戦後の経済状況から貴族院は反対したため、1908 年、衆議院が単独で加盟する。新たに独自の外交ルートを獲得した議員たちは、自らの体験を政府の外交政策の追及に活用した。第 2 章では、日本議員団が 1922 年に再組織された経緯について、宮岡恒次郎と IPU の「非公式」ルートに着目する。第一次大戦に伴い、IPU は活動を停止した。日本との関係の希薄化に不安を抱いた IPU 事務局長ランゲは、国内外の平和主義団体の幹部を務める宮岡を協力者に選んだ。こうした「非公式」ルートの存在からは、IPU と帝国議会の関係が国際平和主義者の重層的なネットワークに支えられていたことを確認することができる。

第 3 章では、戦間期における IPU と日本の関係を論じる。第一次大戦後の IPU は、東欧や南米を中心に新規加盟国が増加したため、多様な地域の代表が参加するグローバルな機構へと変化した。日本の議員たちは、直接的な影響力には懐疑的ではあるものの、国際輿論の形成に有益な組織として IPU を認めることが多く、IPU への参列は、若手の議員が国際感覚を養う経験の場ともなっていた。第 4 章では、戦間期の IPU に最も深く関与した議員の一人である中村嘉寿を取り上げ、その活動を検討する。鹿児島県選出の衆議院議員の中村は、IPU をきっかけに、民間交流事業の立ち上げや移民問題に関心を持ち、「国際派」議員の名声を獲得していく。第 5 章では、1930 年代から 1940 年代半ばにおける IPU と日本議員団との関係を論じる。日本の国際聯盟離脱は、IPU で委任統治問題を引き起こしたものの、日本議員団は IPU の脱退を選択せず、第二次世界大戦後まで IPU の加盟を維持した。当該期の日本代表団は、IPU の場で日本の「議会主義」を強調し、日本に対する国際世論の改善に努めていた。

終章では、本論の要約とともに、第二次大戦後の IPU と日本の関わりが示唆されている。

本論文は、ジュネーブの IPU 事務局付設アーカイブズや衆議院事務局など、国内外の多様な未刊行史料を調査した成果であり、加盟から第二次大戦終結までの日本と IPU の関係史および帝国議会の議員外交の模様を丁寧に描き出している。IPU との関係あるいは議員外交が「帝国日本」の外交

全体の中でいかなる位置を占めていたのかなど、考察を深めるべき論点は残されるものの、日本近代史のみならず、隣接分野にも示唆に富むものである。

よって、本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるのに十分な能力を持つことを認めるものである。